書評 中西裕見子・片桐千亜紀著

『地中海の水中文化遺産』

Chichūkai no Suichū Bunkaisan [Invitation to the Underwater Cultural Heritage in the Mediterranean Sea] (review)

高田 祐一（奈良文化財研究所）
TAKATA Yuichi (Nara National Research Institute for Cultural Properties))

本書は、水中文化遺産から地中海の人類史をひもとく概説書である。本書の構成は以下の通りである。

はじめに
第１章　地中海とその覇権の歴史
　第１節　地中海とは
　第２節　地中海の覇権
第２章　海に沈んだ先史時代の都市遺跡
　第１節　ギリシャ文明の誕生
　第２節　メソーニ湾の水中考古学調査
　第３節　ピュロスの水中文化遺産博物館
第３章　ローマ共和政時代の沈没船
　第１節　アンフォラの船
　第２節　シチリア島の水中文化遺産保護
第４章　海底から蘇ったローマ皇帝のヴィッラ
　第１節　ローマ帝国と温泉保養地バイア
　第２節　陸と海のバイア遺跡
　第３節　バイア海底遺跡の管理
第５章　ローマ帝国時代の沈没船
　第１節　神殿柱の船
　第２節　死者のための船
第６章　海洋都市国家時代の沈没船
　第１節　海洋都市国家と地中海
　第２節　石柱の船
　第３節　ギリシャの水中文化遺産保護
第７章　近代の沈没船から沈没戦闘機へ
　第１節　地中海から七つの海へ
　第２節　クレタに沈んだ蒸気船
　第３節　マルタに沈んだ WW Ⅱ戦闘機
終　章　海が語り継ぐ歴史

筆者らは、長年、沖縄海域をフィールドに水中文化遺産の調査研究を実施している。本務が文化財行政であることから、アカデミックな調査研究にとどまらず公開や活用に向けた仕組みづくりも活動の範囲である。その点においても本書におけるベースとなる問題意識は明確である。「はじめに」で述べられているように、「沈没船などの遺跡の存在が一般に知られてしまったら、盗掘などにあうのではないか。秘密にしたほうがよいのではないか」との問いに対し、筆者らは議論を重ねながら「保存のためのアクセスや情報はできるだけ制限しない、かと言って保護を無視した流行の活用一辺倒に流されて文化遺産を疲弊させない、それらを前提とした上で、保存と活用が共存し、その状態が持続可能な方法を模索する」という極めて明確な結論に達する。本書では実践に向けて、沖縄海域と環境が類似する地中海地域の事例を取り上げている。

そのため、本書の内容は地中海世界を概観しながら、現存する水中文化遺産を紹介する形式であるとともに筆者らの、どうやって水中文化遺産の保存活用を持続的に実現させるか、日本や沖縄地域にどうローカライズできるか、という意識が本文に発露している。水中文化遺産保護への取り組みが重要視されつつある日本においては、地中海史への関心如何に関わらず、文化財関係者であれば、必読の書と言える。

2021年３月、日本における水中調査の先進事例である佐賀県鷹島の蒙古襲来沈没船に関する報告書が刊行された（『蒙古襲来沈没船の保存・活用に関する学際研究』研究代表者：池田栄史、2021年３月）。報告書の中で沖縄県恩納村の地元住民（ダイバー・漁業関係者ら）と宮武正登氏による座談会の貴重な記録が掲載されている。テーマは、一般村民の目線から見た海底

文化財の印象や活用の可能性である（宮武正登「沖縄県恩納村沖合の海底文化財をめぐる座談会の記録」）。文中では、海底文化財の活用による村の活性化（ビジター増加、ダイビング業界への貢献、観光活性化）などが期待される一方で、文化財の盗難リスクや、ゲストへの遺跡の背景となる歴史情報の提供などのハードルが語られる。宮武氏の結論としては「ガイドを含める日本のダイビング業界全体での意識改革という、中長期的な打開策に期待」し、ダイビング団体による水中文化遺産に関わる共通カリキュラム考案や実施が提案されている。それらを考えるうえで、本書の地中海での実践例は参考となろう。

特に終章の「表8−1　水中文化遺産管理の現状」は各事例の概要を簡単に比較でき有用である。表では、公開方法（許可制 or 自由）、ガイド（許可されたダイビングサービス or 政府機関ダイバー or 自由）、ダイビングサービスの訓練受講（必要（有償 or 無償）、なし）、維持費（政府、ダイビングサービス、ダイビングサービスによる労働提供）など、各項目を端的にまとめている。

そして、筆者らは、持続可能な保護活用モデルとして、水中文化遺産保護に協力してくれるプロダイバーやレジャーダイバーを増やし、モニタリングを担ってもらいながら、活用するのが最も有効と考えている。その実現には４ステップある。ステップ１では地元ダイビングサービスの協力を得ながら子細な調査研究の実施、ステップ２では地元ダイビングサービスへのトレーニング・ネットワーク構築、ステップ３では、価値上昇に伴って見学者が増加するが、適切なダイビングサービスによる利用で、より人目にさらされることによってモニタリング効果が増加する、ステップ４は利用者主体のルール作りと報告先受け皿（地元教育委員会）の確保である。特にステップ２で着実にダイビングサービスの質的担保を実現できれば、ステップ３でスムーズに保護と活用面で大きな収穫を享受できるだろう。

正直なところ、私自身は地中海史に詳しくなく、それほど関心があるわけではなかった。しかしながら、先史時代から第二次世界大戦までの歴史的な流れが平易な文章で描かれ、理解が容易であった。

さらに本書の大きな特徴として、実際に歴史舞台となった水中遺跡に筆者らがボンベを背負って自ら潜水している点が挙げられる。文化財関係者にとって、現地や現物が重要であることは言うまでもない。水中文化遺産の現地である海底に赴き、生の体験をレポートしている本書は、地中海に誘うガイドブックの役割をも果たすだろう。特に第３章シチリア島のカラ・ミノラ沈没船遺跡の現地調査が壮絶であった。ブイが激しい潮の流れによって傾くほどの海域に潜行するのは恐怖である。筆者は「すさまじい急流を想像してしまい、心臓が激しく脈打つのがわかる。覚悟を決めるしかなかった」と述べている。その後の展開については、実際に本書を手に取って確かめて頂きたい。

本書は、地中海史に沿って、筆者らの現地調査を追体験しながら、水中文化遺産保護を考えることができる良書である。